

サンデーサイレンスの  
子供達まつした  
しんべい  
松下 慎平

受賞のことは  
一昨年は最終選考。昨年は佳作。そして今年は次席に選出していた。光栄の至りに存じます。3度目の応募にして初めて全ての選考委員の方々から誌面で選評をいただきました。ところがなにより嬉しく、今後の励みとなりました。ただ、毎年締切日の朝に新特急郵便を使って滑り込みで応募していたのですが、そのサービスが来春で終了。来年も期日までに原稿を仕上げ無事に届けることが自分のできるだろうか。それだけが不安でなりません。

プロフィール  
奈良県出身。県内の畝傍高校卒業後、オーストラリアにて見習い騎手のライセンスを取得。帰国後、大阪大学経済学部に入學、後に中退。現在は『テンポイント』というコンビで芸人として活動中。

サンデーサイレンスが死んだ。

偉大過ぎるサラブレッドの早逝は私が高校3年生、騎手を目指し渡豪する前年2002年8月の日の出来事であった。その知らせを炎天下の乗馬レッスン中に伝えられ、暑さのせいだけではない目眩を馬上で感じたことを今でも覚えてる。

当時、種牡馬サンデーサイレンスは日本競馬界を席卷していた。気性に難のあることが多い彼の子供達を華麗に乗りこなしレースに勝利する。そんな己の姿を騎手を目指す誰もがその夢の先に見たに違いない。騎手として日本に戻ってこられたとしても早くも10年。その頃には彼の子供達はターフを去っていることだろう。そんな鬱々とした思いを一変させる知らせが届くのは翌年4月、日本人も多く在籍する豪州の競馬学校に私が入学した翌週のことであった。「豪州産サンデーサイレンス産駒サンデージョイがオーストラリアンオークス制覇」。その後をサンデーの子供は追いかけてきた。いや、追っつけてきたのは私か。学内は色めき立ち、皆が興奮気味に口を揃えて言う。第二のサンデージョイは必ず現れる。その背中に跨っているのは自分だと。

同年8月1日、南半球の季節は冬。日本とは異なり豪州のサラブレッドはこの日に加齢される。競馬界が区切りを迎えるそんな日に私は単身で学校から1ヶ月間の研

修を言い渡された。それも1番手として。ただこれは騎乗技術が評価されたわけではなく、英語のヒアリングと語彙力が他の生徒より幾分マシだという何とも残念な理由からであった。

私の研修先は所謂オーナーブリーダーの体をなす牧場で、学校のある海辺の市街地から車で内陸に4時間。山に囲まれた敷地に1200mの周回コースがありウォーキングマシンや練習用のゲートも設備されていた。まさに大牧場。にもかかわらず、広い敷地内に馬が全然いない。聞くところによると以前はかなりの数の馬を扱っていたが、今では家族で世話できる十数頭だけを所有しているらしい。そのうち何頭かは調教師に預けているので、繁殖牝馬を除くと現役馬は1頭だけ。それだけ聞くと随分景気の悪い話に聞こえるが、金銭的な問題は一切なく、馬を世話するには、少頭数の方が何かと都合がよいと馬好きの牧場長がここ数年で気づいたらしい。

その馬好きはドンと名乗った。テンガロンハットに髭、恰幅が良く、声の大きな初老の男性。その姿や立ち振る舞いは映画や漫画の世界の牧場長が抜け出てきたかのようであった。緊張する私をドンは挨拶もそこそこ一番近くの馬房の前に連れて行った。そこにいたのは馬房の奥で耳を後ろに倒し、何も無い壁を虚に見つめる1頭の黒鹿毛。ドンは誇らしげに髭に覆われた大きな口を開く。

「彼女の名前はアミー。明日から君が乗るサンデーサイレンスの子供だ」

アミーはデビューすらしていない3歳になったばかりの牝馬で、100万豪ドルで購入したのだという。当時のレートで約7000万円。サンデーの子供としては適正価格なのだろうが、研修生が乗るにはいささか高額すぎる。繁殖牝馬として迎えたが、せっかくだから走っている姿を見たいという牧場長の気まぐれで最近調教を始めたとのことだ。君と入れ替わりで息子に休暇を与えてしまったから君が乗るしかない」とドンは笑った。正直荷が重過ぎると感じたがそれでも期待が不安を遥かに上回った。サンデーの子供に乗れる。浮わつく私にドンは「ただ彼女は少しナーバスだから気をつける」と似合わない静かな声で言ったが、私はそれでこそサンデーの子供だとさらに胸を躍らした。愚かにも。そして翌日、愚か者は地獄を見ることになる。

朝、馬房から出すための頭絡をつけるのに30分かかった。彼女からは外に出たくないという明確な意思を感じた。なんとか鞍を乗せ、角馬場へと移動するとアミーはさらに暴れた。ドンの手を借りその背に跨った頃には相当な体力と時間を消耗していた。ウォームアップには十分過ぎるほど暴れたアミーをドンは私を乗せたままトラ

ックコースへと引いていく。角馬場ですら制御できなかつた私は「今日はやめてくれないか」と訴えたが、前を歩くドンは感情の読めない声で「君のベストを尽くせばいい」とだけ呟いた。

コースに入り、ドンがリードを外した瞬間、外のラチに向かつてアミーは駆け出した。コントロールも何もあつたもんじやない。そのまま外ラチのギリギリを駆けるアミーの背中では手綱を強く握ることしかできない。学校でも制御不能の馬の背中では体験したことがあつたが、コースが狭いためトップスピードは出ないようになっていた。が、この直線は約400m、制御不能となつたアミーはグングン加速する。土を蹴るドッドツという音の感覚はどんどん短くなり、私の心臓の音が重なつた。コーナーではスピードが幾分落ちるものの遠心力と馬体の傾きで馬ごと転んでしまうのではないかとという恐怖。何とかその遠心力に耐えた先にはまた直線。再度アミーは加速する。怖さのあまり腰が落ち、鞍に尻が当たる。その弾みで外側の鐙が外れた。もう手綱ではなく立髪を掴みしがみついているだけだつた。そのまま再度コーナーに差し掛かる。スタート地点にドンが立っている。それを確認すると同時にスピードが少し落ちたのを感じた。その瞬間、私はアミーから意図的に滑り落ちた。その頃には鐙は両方外れていたのだから立髪を離す。その行為自体に恐怖はなく、それよりその暴力的なスピードから解放されたい一心であつた。不思議と落馬の痛みは全く感じない。さらにスピードを上げ速さかつていくアミーの脚音だけが冷たく硬い地面を通してクリアに聞こえていた。

コースを2周したところでドンに捕まつたアミーは幸いなことに怪我もなく、鞍を外し馬房に戻された。その間、ドンは何も喋らず、私は泥だらけのまま彼の後ろを黙って歩いて歩いた。馬具を洗う洗濯機のリズミカルな

音だけが牧場内に響く。アミーを馬房に戻したドンは静かに強い口調で話し始めた。

「何故、自ら降りた?」「ここに何をしにきた?」「馬を無事にこの場所に返すのが君の仕事じゃないのか?」「私はそのどの問いかけにも答えることができない。長い沈黙の後、「君にもアミーにも怪我がなくて本当によかつた」ドンは優しい声で言つた。私は安堵と悔しさと申し訳なさとその他の言葉にならない感情が溢れ、アミーの馬房の前でしばらく泣いた。いつの間にか洗濯機は停止し、辺りはとても静かだつた。

その日の夜、ドンはアミーが1歳のある日、放牧先の柵の間を抜け、牧場から逃げ出したことがあるのだと教えてくれた。翌日近くの山の中で見つかつたのだが、それがきっかけで性格が変わってしまったのだという。怖い思いか、痛い思いをしたのだろう、彼女には本当に悪いことをしたと申し訳なさそうに話すドンを見るとまた泣けてきた。

翌日は大事をとって休養日となり、さらにその翌日、重い足取りで馬房に向かうとアミーは視界を遮る効果のあるプリンカーをつけていた。彼女は広いところが苦手みたいだからとドンが用意したものだつた。洗い場に繋がれたアミーは嘘みたいに大人しい。その後の角馬場での運動も暴れることなくこなす。トラックに出るとややテンションは上がったが制御不能になることはなく、指示に従つてくれた。私は偉大な馬具を作り出した先人にかつてないほど感謝した。それから約1ヶ月は本当に充実した時間であつた。落ち着いたアミーの動きはかつて跨つたどの馬より洗練されているように感じた。比例するように私の技術も向上している。そう感じた。さすがサンデーの子供。彼女と自分の輝かしい未来を確信した私は、研修が終わる前日にドンに直訴した。アミーのブ

リンカーを外してくれないだろうか? 1ヶ月共に過ごした今なら大丈夫。心は通つたはずだ。私もレベルアップしている。絶対何とかしてみせる。

全く何ともならなかつた。そんなうまいこと行くほどこの世界は甘くない。同じように制御不能になつたアミーはトラックを全力で3周した。1ヶ月前と違うのは馬上で半ベソをかいている愚か者が最後まで見ついていたことだけ。ドンは「これからたくさん学びなさい」と満足そうに笑つていた。

別れの日、アミーを前にドンはなんてことはないという口振りでももろに話し始めた。「実は彼女はサンデーの子供なんかじゃないんだ。もちろん100万豪ドルでもない。デビュー前でもない。おっと、昔逃げ出したのは本当だ。あれは本当にすまないことをした。それはいい。私は研修に来る生徒に、一番難しい馬をサンデーの子供だと紹介するんだ。するとどんなに辛くてもみんな真剣に向き合ってくれる。そうだ、彼女の名前は去年研修にきた君の先輩がよく聴いていた日本の歌手からとつたんだ。先月まではもつと長い名前だつたんだけど今はただのアミー。彼女は君が来る前の週に小さな競馬場の未勝利戦で大敗して1勝もできないでここに帰つてきた。そんな彼女は君にたくさんを教えてくれたのだろ。いいかい。君が今後出会う全ての馬はサンデーサイレンスの子供なんだ。同じように大切に扱い、同じように喜びを持って接し、そして同じように愛しなさい。それは一番難しい。ただ、それが全てだ」

もう何も言葉が出なかつた。私の返す言葉を浮かべ待つドンに、ようやく理解が追いつき下手くそな英語で言葉を紡ぐ私。そんな二人のおかしなやりとりを私の愛すべきサンデーの子供は静かに聞いている。その大きな耳と目をこちらに向けて。